

岡の家

すずき
鈴木 三重吉

岡の上に百姓のお家がありました。家がびんぼうで手つだいの人をやとつことも出来ないで、小さな男の子が、お父さんと一しょにはたらいしていました。男の子は、まいにち野へ出たり、こくもつ小屋の中で仕事をしたりして、いちんちじゅう休みなくはたらきました。そして、夕方になるとやつと一時間だけ、かってにあそぶ時間をもらいました。

そのときには、男の子は、いつもきまつて、もつりつづける岡の上へ出かけました。そこへ上ると、何十町か向うの岡の上に、金の窓のついたお家が見えました。男の子は、まいにち、そのきれいな窓を見にいきました。窓はいつも、しばらくの間、きらきらと、まぶしいほど光っています。そのうちに家の人が戸をしめると見えて、きゅつと、ひょいと光がきえます。そして、もう、ただのお家とちつともかわらなくなつてしまいます。男の子は、日べれだから金の窓もしめるのだなと思って、じぶんもお家へかえつて、牛乳とパンを食へて寝るのでした。

或日お父さんは、男の子をよこで、

「おまいはほたんとくはたらいておくれだ。そのほつびに、きょうは一日おひまを上げるから、どいへでもいつてお出で。ただ、このおやすみは、神さまが下さつたのだということをおぼえてはいけないよ。うかうかくらししてしまわないで、何かいいことをおぼえて来なければ。」と言いました。

男の子はたいそうよろこびました。では、今日こそは、あの金の窓の家へいって見ようと思つて、お母さまから、パンを一きれもらつて、それをポケットにおこんで出ていきました。

男の子にはたのしい遠足でした。はだしのまま歩いていくと、往來の道はほりの上に足のあとがつかまりました。うしろをふりかえつて見ると、じぶんのその足あとがながくつづいていきます。足あとには、どいまでもじぶんに、ついて来てくれるように見えました。それから、じぶんの影法師も、じぶんのするとおひら、一しゅに、おどろく上つたり、走つたりしてついて来ました。男の子にはそれがゆかいでたまりませんでした。

そのうちに、だんだんにおなががすいて来ました。男の子は道はたのいけがきのまえを流れている、小さな川のふちにすわつて、パンを食へました。そして、すきとおつた、きれいな水をすくつて飲みました。それから、食へあましたかたいパン

いちんちじゅう…
一日中。

町…むかしの距離
の単位。一町は約
一〇九メートル。

おまい…おまえ。

往來…人や車が通
る道。道路。

